

木造不空羂索観音菩薩坐像 国宝

不空羂索観音は、しばしば仏教における慈悲の神とされる菩薩観音の「変化観音」のひとつである。その名前は、手に持っている紐すなわち「羂索」に由来している。この観音はこの紐を使って衆生を救済し、害悪から守り、そしてその願いや願望を叶える。

この像は寄木造りで 1189 年につくられたもので、南円堂の本尊である。不空羂索観音は 4 対の腕を持った姿で表されている。最初の 1 対は胸の前で合掌している。2 つ目は、左腕は蓮を持ち、右手は僧の杖を持っている。3 つ目は、腰の外側に広げられ、その手のひらは上向きになっている。4 つ目の対の左手は紐を持ち、右手には払子を持っている。

髪の毛は高い房に編み上げられており、その上には小さな阿弥陀仏の立像をあしらった冠をつけている。額には縦型の第 3 の目がある。上半身は、左肩から鹿の毛皮が斜めにかけられている。

仏師の康慶とその弟子たちが 15 カ月の期間をかけてこの像を制作した。大きな体と、威厳のある顔の表情からは、仏師たちが奈良時代（794～1185 年）や平安時代（794～1185 年）の初期のスタイルを意識的に模倣したことがうかがえる。